布施利華

第373号（令和元年5月7日(火)発行）
発行所
京都女子大学 宗教部
京都市東山区今熊野北日吉町35
電話 075（531）7074

すべて悪しきことをなさず、
善いことを行い、
自己の心を浄めること、
――これが諸の仏の教えである。
（『ダンマパダ』一八三、中村元訳）

仏法に映る私

現代社会学部准教授　藤井隆道

「私」について学ぶ

五つの学部と十を超える学科を擁する京都女子大学では、人間とその文化、社会について、あるいは自然について学び、また様々なスキルを修得するための多領域にわたる教育が行われている。そこで修得した知識や技術は、社会で活躍していくうえで役立つことだろう。

ところで、これらの知識・技術の内容は、日々の生活や社会的活動のなかで、「私」が向き合っていく事柄である。これらの事柄に向き合う「私」自身についてはどうだろうか。この「私」について学ぶことが、仏教学の担う大切な意義のひとつである。

仏教学の授業で、自分を見つめることが大事だと折に触れて聞いていると思うが、そのことがどうもピンとこない学生も多いようである。自分のことは自分が一番よく知っているのだから、それを知るために他者の言葉に耳を傾けることなど必要ないという意見も、もっともであるように聞こえる。しかし私たちは本当に自分のことをよく知っているのだろうか。そのことについて、仏教以外の観点も交えつつ考えてみたい。

外に向いた眼

まずは単純に視覚を例にとって、自分の姿を眼で見るという状況を考えてみよう。みなさんはきっと普段、いたる所で鏡に写る自分の姿をチェックしているだろう。最近では、スマートフォンのカメラ機能を用いて、事あるごとに「自撮り」している人たちもいる。

しかし、鏡や写真のなかで構えている姿は、本当の私なのだろうか。まず、そこに見えているのは、私の映像にすぎないのであって、私そのものの姿ではない。私たちの眼はいつも外に向いていて、他人の姿を目の当たりにするのと同じように、自分の姿を全体として見ることができないというのは示唆的な事実である。そしてまた、スマートフォンの写真加工アプリに象徴されるように、私たちは、自分のありのままの姿ではなく、自分の見たい姿を見ようとする。

自分自身を見ることの困難については、古代インドのウパニシャッドというテキストにおいても、次のように説かれている。「アートマン（自己）とは何か」との問いかけに対して、ある賢人は答える――「私」は世界を見る主体であり、見られる対象ではない。だからそれを見ることはできない。同じように、「私」について聞くことも、思考することもできない。つまり「私」は、見たり聞いたり思考するという営みのこちら側にいるのであって、その営みの向こう側にいるのではない。

ウパニシャッドの賢人は、どのようにしても知りえないこのような自己は、いかなる限定も持たない無限の実在なのだと主張する。有名な「梵我一如」の教説である。無我説を標榜する仏教が、こうした「無限の自己」を認めることはないが、ウパニシャッドから、自己の本当のあり方を問うという探求テーマを受け継いだのである。

自己に関する幻想

自己を知ることの困難について、さらに別の角度から考えてみたい。私たちは、自分自身について誤解する、そのような仕組みが心に備わっているという知見が、人間心理を研究する諸領域において得られている。たとえば「自己奉仕的バイアス」とは、成功した場合は、それが自分の能力など内的な要因によるものであり、失敗した場合は、外的な要因によるものだと思い込むような心の傾向のことである。つまり、成功は自分のおかげであり、失敗は自分以外の他の事柄のせいだと人は考えがちだという。

これは一例であるが、心理学のいくつかの知見が示すのは、私たちが、自分のことを様々な点で高く評価したり、あるいは自分の行いを正しいものであると思い込み、正当化しようとする性向を持っているということである。このような研究結果は、仏教の「煩悩」についての見方とよく符合するように思われる。

こうした心の仕組みや傾向は、生物としてのヒトが、進化の過程で獲得し、環境に適応し生き延びるうえで役立ってきたのかもしれないし、あるいは文化的な所産であるのかもしれない。いずれにせよ、自分のことになると、途端に私たちの目は曇ってしまうのである。さらにそれが自分の属する集団に向けられたならば、「私たちは正しく、あの人たちは間違っている」といった信念が、場合によっては、異なる集団間の深刻な対立や偏見を生んだり、助長することにもなりかねない。

仏法という鏡

自己を知ることは大切であるが、簡単なことではない。そこで仏教の出番である。仏法は鏡であるとよく言われる。この比喩の意味は、仏教の教え（仏法）を通じて、自分の本当のすがたが知られるということである。

人間のあり方を探求する学問領域はたくさんあり、しかも日々発展している。それでも、仏教が担う意義が失われることは決してないであろう。仏教が問うのは、人間一般というより「この私」のあり方である。たとえば煩悩の概念は、人間を理解するのにも役立つ。しかしその本来的な意義は、激しい欲望や自己中心性に振り回されて生きる自身の姿を見つめたときにこそ明らかになるのである。

では、仏教を通して知られる自己の姿はどのようなものだろうか。これに出来合いの答えがあるわけではない。一人一人が、あたかも鏡に映る「私」を見つめるように、仏法に映る「私」を見つめるなかで了解されるものである。「無我」や「縁起」、そして「煩悩」といった教説は、いずれもその確かな手がかりとなるであろう。そして仏教は、ひとつの答えが出たらそれで終わりというようなものではなく、日々歩んでいく道である。

私を照らす光

仏教の教えに耳を傾けて、そのうえで自らの思いや行い、生活を振り返るならば、自分の力では決して見えなかった「私」の姿が見えてくるだろう。仏教は智慧と慈悲の教えであると言われる。しばしば光に譬えられる仏の智慧は、私のありのままの姿を照らし出す。そして仏の慈悲は、ありのままのその姿を包み込むのである。

令和元年5月 月例礼拝日程表

日	曜日	講時	対象学生	担当	講師
7	火	1	心理1	森田	上野　隆平
		3	造形3	森田	告井　幸男
		4	英文3A	黒田	椋本　久雄
8	水	1	法学3	清基	野村　淳爾
9	木	1	現社3C	森田	桜沢　隆哉
		4	現社3A	赤井	山中　延之
10	金	1	食物1A・1B	塚本・井上	藤井　隆道
		2	教育1	三浦	秋本　勝
13	月	1	現社1A・1B	中西・野村	西　義人
		2	食物3	普賢	竹本　了悟
		3	国文1A	普賢	塚本　一真
		4	史学3B	那須	赤井　智顕
22	水	1	法学1A・1B	藤井・秋本	安田　章紀
		3	国文3B	普賢	山田　雅彦
23	木	1	現社3D	普賢	倉本　祥子
		4	現社3B	藤井	横山　仁視
24	金	1	英文1A・1B	秋本・三浦	森田　眞円
		2	心音3	塚本	松宮　園子
		4	現社1C	那須	野村　淳爾
27	月	1	造形1A・1B	井上・上野	黒田　義道
		2	史学1A	野村	竹本　了悟
		3	国文1B	黒田	那須　公昭
		4	児童1	黒田	三浦　真証
28	火	1	教育3	西	上月　智晴
		4	英文3B	清基	村井　尚子
29	水	1	養音1	森田	普賢　保之
		2	福祉3	黒田	今田　由香
		3	国文3A	森田	山本　光英
31	金	3	児童3	秋本	正野　良幸
		4	現社1D	安田	秋本　勝

子どもたちとともに
②童謡に込められた心

「童謡」は広く子ども向けの歌を指している。このように理解している大人は少なくない。これは広義の解釈である。わらべうたも唱歌もテレビアニメの歌もすべて「童謡」なのである。一方で、狭義の意味の「童謡」は、大正時代に発行された『赤い鳥』（鈴木三重吉主宰）や『金の船』（斎藤佐次郎主宰）等の子ども向け雑誌に掲載された歌のことを指している。明治時代に発表された「唱歌」の歌詞が難解であるとして、子どもの感性に根差した新しい表現を模索したのである。代表作には「からたちの花」（北原白秋作詞、山田耕筰作曲）、「かなりや」（西城八十作詞、成田為三作曲）、「青い目の人形」（野口雨情作詞、本居長世作曲）他、現代でも歌い継がれている多くの歌がある。これらの童謡作品は、当時、唱歌中心であった子ども向け歌唱曲に新鮮さを与え、多くの支持を得ることとなった。▼〈かなりや〉の詩をみてみよう。（1番）「歌を忘れたカナリヤは、後ろの山に捨てましょか、いえいえそれはなりませぬ」、（2番）「歌を忘れたカナリヤは、せどのこやぶに埋めましょか、いえいえそれはなりませぬ」、（3番）「歌を忘れたカナリヤは、柳の鞭でぶちましょか、いえいえそれはかわいそう」と続く。何とも残酷な歌詞である。それに続く詞は一変する。（4番）「歌を忘れたカナリヤは、ぞうげの船に銀のかい、月夜の海に浮かべれば、忘れた歌を思い出す」。この詩を書いた西城八十は、自分の置かれた状況を重ねてこの詩を書いたそうである。ここには、環境を整えれば人は内に秘めた能力を発揮することができる、という意味合いが込められている。音楽的にも工夫がある。作曲家の成田為三は1・2・3番を悲しげな旋律で彩ったのに対し、4番の旋律では光明（希望や救いの手）がみえてくるような開放感を紡ぎだしている。▼童謡運動は軍国主義の考え方が時代を突き動かそうとしている中で、児童中心主義の思想を支え、子ども観の転換に大きな役割を果たした。子どもを小さな大人としてしか理解しない時代にあって、「子ども」の存在を浮かび上がらせ、子ども育ちにかかわる大人たちへ警鐘を鳴らしたのである。▼昨今の虐待報道を見聞きすると心が痛む。この底流には、子どもを一人の人間として認めようとしない身勝手な価値観が潜んでいる。子どもと共に生きる私たち大人が利他の精神に立ち返って考えてみたいものである。

（児童学科・神原　雅之）

日本音楽著作権協会(出)許諾
第一九〇三四九九―九〇一号

澪標

皆さんは阿弥陀仏の教えと道徳の違いをどのように考えているであろうか。阿弥陀仏の教えも道徳も同じように考えている人も多いかもしれない。

道徳は社会生活を円滑に営むための大切な規範である。一方、阿弥陀仏の教えは社会規範ではない。仏教ではこの世界のことを娑婆と呼んでいる。娑婆とは刑事ドラマなどでは、開放された自由な世界という意味で使われているが、仏教では、堪忍土、つまり堪え忍ばなければならない世界という意味で使っている。その娑婆を乗り越えていく道を説いているのが阿弥陀仏の教えである。私たちのありのままの姿を明らかにし、そのまま救い取るという教えである。

私たちのありのままの姿とはどのような姿であろうか。親鸞聖人の作られた和讃には「悪性さらにやめがたし　こころは蛇蝎のごとくなり」とある。もって生まれた悪をなす性質は決して止めることはできないし、私たちは毒蛇や蝎のような煩悩という毒をもっている、と示されている。このような見方を後ろ向きと言う人もいる。はたしてそうであろうか。あるものをないこととして現実から目をそらすことこそ後ろ向きであろう。

聖人が往生されてから七五六年という歳月が流れている。阿弥陀仏の教えはその間多くの人々を救ってきた。科学技術の進歩がめざましい現代にあっても、人間そのものは昔も今も何ら変わっていない。だからこそ、科学技術の進んだ現代にあっても、阿弥陀仏の教えは大切なのである。

（普）

第45回宗教教育海外研修会（インド・ネパール研修旅行）旅の記録

今回の宗教部海外研修は二〇一九年二月一五日から二五日の行程で実施されました。インド・ネパールの釈尊ゆかりの土地（仏跡）を周り、全員が無事に帰国できたことが、まずは大きな成果でした。このたびの研修を物心両面で支えてくださった皆様方に、まずは心からお礼を申し上げます。

今回の行程は、デリーからインドに入り、タージマハルで有名なアグラ市内を見学の後、本格的に仏跡を訪れるものでした。仏跡についてのルートとしては、①釈尊がさとりを開かれてから初めての説法（初転法輪）をされるまでの旅を逆に歩く、②釈尊が亡くなられる直前の最期の旅を辿る、③釈尊誕生の地、ルンビニー訪問、これら三つに分けて考えることができます。特に印象深かった事柄をご紹介します。

最初は初転法輪の地サールナートから、釈尊がさとりを開かれたブッダガヤーに至る行程です。初めに訪問した仏跡はサールナートです。往年の寺院跡が美しい公園に整備されていました。ブッダガヤーでは大菩提寺にお参りしました。釈尊がさとりを開かれた金剛法座の周りには、世界中から仏教徒が集まり、様々な言語のお経や法話、礼拝の作法を目にすることができました。二十名程度の私たちは、弱小（？）集団です。群参する人々にいささか圧倒されがちでしたが、この後、訪れた主要仏跡では、しばしば同様の経験をしました。仏教が世界中で人々のよりどころとなっていることを体感する経験でした。

ブッダガヤーに続く行程は、釈尊最期の旅を追います。出発地ラージギル（王舎城）から釈尊入滅の地クシナガラに向かいました。

ラージギルは、親鸞聖人も大切にされた『仏説観無量寿経』の舞台です。「王舎城の悲劇」と呼ばれる骨肉の争いが起こり、それが機縁となって、釈尊は阿弥陀仏によって凡夫（自分中心の心に振り回され続ける平凡な人間）がすくわれていく教えを明らかにされたと伝えられます。当時の城壁や牢獄跡が、傲り、怨み、僻み、孤独といった人間の本質的苦悩は今も昔も変わらないことを改めて教えてくれました。

釈尊はラージギルを出てパトナ、バイシャリを経てクシナガラで亡くなりました。この間、釈尊は病気にかかり、その中で旅を続けました。体調を崩し気味の学生さんが自分と重ねて「お釈迦様もこの道を病気の中で歩かれたのでしたね」と話してくれました。クシナガラには、釈尊の涅槃像が安置された小さなお堂があります。師匠を亡くした弟子たちの悲しみや、その教えを後世に伝えようとする決意が身に迫る思いでした。

旅程の終盤は、ネパールです。仏跡としてはルンビニー訪問が最大の目的となります。ルンビニーは広大な公園に整備されていました。周辺は実にのどかな田園風景です。釈尊は「ルンビニーの園」でお生まれになったなどと言われますが、その一端を現代でも感じることができました。また、ネパールではカトマンズ本願寺にもお参りしました。遠い異国の地に、同じ教えを大切にする仲間がいるということは、実にうれしいものです。

さて、今回の旅行全体を通じて感じたことは、自分が一体、どこを見て暮らしているのかということです。旅行中、日の出・日の入りを何度も見る機会がありました。ヴァーラーナシーでガンジス河から見た日の出、バスで移動中に見た日の出・日の入り、王舎城で見た日の入り、ネパールのナガルコットで眺めた日の出とそれに映えるヒマラヤ。私は旅行前のいつ、日の出・日の入りを見たか、思い出せませんでした。見ているのは時計ばかりです。時計に追われる生活は、時間を分断してしまいます。生きること全体を見渡すような、大きな物事の見方が損なわれるような気がしてなりません。

日の出・日の入りを見てみませんか？　インドで見た太陽も、日本で見る太陽も同じ太陽です。生きること全体を考える仏教に、改めて心を向けませんか？　昔も今も変わることなく人々を支えてきた教えです。

（団長　黒田義道）

国文4　荒井多恵

インドに行くと人生観が変わるとよく言われますが、それほどの人生観を持たない私にとってはどんな旅になるのか…。

行ってみたら…雄大な大自然・偉大な世界遺産・ガンジス川の夜明け・霊鷲山の夕日・ヒマラヤの夜明け・荘厳な仏教遺跡やバスで越える国境など、どれもが大変刺激的で心に沁みました。言葉にならない、できない光景の数々、思わず息を呑む私でした。

そして、「貧しさは不幸ではない」という、引率してくださった黒田先生のお言葉が印象的で、人の幸不幸を決めるものは何か改めて考えさせられる旅でした。そして私は本当に幸せだと実感したのでした。

今回の旅で出会った多くの人々や全てのものに感謝の気持ちを持って今後も生きていきたいです。

みなさん、ありがとうございました。私の人生の宝物になりました。

国文2　今井菜々恵

初めてインド・ネパールを訪れ、私の予想しなかったことを経験しました。まず日本との環境の違いに驚きました。いたるところで見かけた野良犬、牛、ヤギなどの動物たちや道端のゴミ、信号が無く、さまざまなクラクションが鳴り響く道路。見慣れない景色に圧倒されました。

今回私たちは八大聖地のうち六つを巡りました。特に釈尊成道の地ブッダガヤはさまざまな国の仏教徒が訪れ、それぞれのやり方で礼拝をしていました。同じ場所を目指して世界各地から人が集まっていました。

そして、この旅で特に印象に残ったのはガンジス河の朝日です。まだ暗いうちから多くの人で混み合う道を通り抜け、船に乗ってたくさんのガートや沐浴をする人、洗濯をする人、火葬場、昇ってくる朝日を見ました。そこには生きている人と死が混在していて、どちらもがすぐ近くにあるように感じました。今回の旅行で新しいことを見ることができてよかったです。

食物1　上原珠美

今回の研修旅行で初めて海外に行きました。驚きばかりで映画の世界にいるような感覚でした。

旅行中、仏教の聖地はもちろん他宗教の文化も見聞きすることができ、二カ国以上の国に訪れた気持ちになりました。また、仏教学で学んだ聖地に訪れて、自分の目で見ることの大切さを強く感じました。旅行中に教わった「仏教は人と出会うことで広まり、戦いをして広まっていない。人との出会いは大切にすること。」や「人の幸せを願い、人の不幸を一緒に悲しむ。」という言葉がとても印象に残っています。その他に、朝陽や霊鷲山からの夕陽と太陽を眺める機会が多かったですが、どれもこれまでに見たことないほどきれいでした。食事では初めて見る食材の使い方があったので家でも作ってみたいなと思いました。

旅行での貴重な経験を無駄にせず日々の生活に生かしていきたいと思います。

心理1　兼重未菜実

「死ぬまで海外旅行は行かない」と言い張っていた私ですが、授業で配られた案内を見て、なぜかインドに行ってみたくなりました。インドの町はたくさんの車やバイクが走り、道を歩いたり渡ったりするのも、スリル満点でした。初日に行ったタージマハルは、大きさや、シンメトリックなデザイン、大理石の美しさに圧倒されました。ガンジス川ではヒンドゥー教徒の沐浴風景を見学し、水につかり熱心に祈りを捧げる人々の姿を見て、人生観や宗教観の違いを感じることができました。

また、自分自身が仏教聖地に立ち、釈尊がここで過ごし、ここから仏教が広がったんだなと考えながら、先生やガイドさんの話を聞くと、仏教の長い歴史を感じることができました。

今まで出会ったことのない価値観や文化に触れ、貴重な体験をすることができました。また、違う国から日本を見ることで、日本の良さを改めて感じることができ、とても充実した十日間でした。

国文2　川口由季

この研修で私が考えさせられたことは「不幸とは何か」ということです。

インドでもネパールでも多くの物乞いの人がいました。きっと日本人の価値観だと「貧しいかわいそうな人だ」という考えを持つ人が多いのではと思います。しかしインドのガイドさんが「彼らは物乞いをして生きることを恥ずかしいとは思っていない。それが自分の生き方だと思っている」と話していました。この話以前にガイドさんが「自分は菜食主義だから卵や肉は食べない。だからおいしいって勧めるけど味は知らないよ」と話した時がありました。私は始め「物乞いをしないと生きていけないのはかわいそう」「おいしいものを知らずに生きているなんて」と思いました。しかしガイドさんの説明を聞いて、私は私自身が勝手に彼らを不幸な人と決めつけてしまっていたのだと気づきました。それはとても心の貧しい考え方だと思いました。

この研修は大切なことに気づかせてくれたとても良い研修でした。

国文2　北澤奈美

なますて～。わたしの海外旅行デビューは、このインド・ネパール研修旅行の十泊。白く霞む空気に鳴りやまないクラクション、人と車が入り乱れる道路、しつこい物売りや物乞い、そこら中に溢れかえるごみ、たくさんの野良犬など、日本では見ることのない景色が次から次へと目に飛び込み、その光景に釘付けでした。特に印象に残ったのは、ガンジス川での沐浴の風景です。早朝から多くの人が集まり、川へと続くガートは混雑をしているのにも関わらず、不思議とそこには静けさがありました。他にも、ブッダガヤなど仏教の聖地を巡り、世界中から集まる仏教徒の姿を見て、その信仰の形と厚さに驚き、同時にものすごいエネルギーを感じてきました。研修は数日間でしたが、ここに書ききれないほど充実したものでした。すべて自分の目で見て、自分で食べ、様々な体験をすることができて本当に良かったです。常識を覆されるあの刺激的な世界に、わたしはもう一度行きたいです。

英文2　近藤　彩

最も印象に残っていることは世界遺産タージマハルの観光です。訪れる前は、様々な国からの観光客が多いと思っていましたが、インドの方が多くて意外でした。写真撮影を禁止されている所があり、実際に目で見ることが出来て良かったです。ガンジス河での沐浴風景見学は、日本では決して目にすることのない光景だったので、宗教信仰の違いを直接感じました。また、仏教学で耳にしたことがある場所にたくさん行き、より深く釈尊について知ることが出来ました。現地で教えてもらう機会があるとは、研修前は思いもしていなかったので、不思議な感覚でした。ネパールでは天候が良く、ヒマラヤを鑑賞したことが思い出深いです。今回の研修では、町や食事、服装、暮らしなどの面において非日常的なことばかりに出会いました。個人では行くことがなかなかないと思うので、参加して色々な体験が出来て良かったです。

史学2　重田鮎美

今回の研修旅行では、言葉だけでは分からない事を知る事ができました。

中学校でインドのカースト制度を習った時に、なんてひどい考え方をするのだろうと思い、それを信じる人たちはどのような気持ちで信仰しているのか全く理解ができませんでした。ですが、インドへ行き、その国の方のお話を聞かせていただくことで、少し理解ができたように思います。私はヒンドゥー教ではありませんので同意をすることができる話ばかりではありませんでしたが、ヒンドゥーの教えが彼らの生活に根付いていて、どのような気持ちで信仰しているのかを知る事ができました。

彼らの考え方に触れ、仏教の考え方について沢山考えさせられました。今回の経験を胸に、三回生の仏教学の講義などを通して仏教の教えをより深く考えていきたいと思います。

史学4　高田梨央

当たり前が当たり前ではない。そのことに気づけた研修旅行だった。水道水は飲めず、トイレには紙がない。そもそも水が流れない場所も多い。ご飯は、食べる度に腹痛に悩まされる。汚れが取れ切れていない食器。出発が遅れたにも関わらず無愛想な客室乗務員。そして、一番衝撃的であったのは、インド人の生活である。乞食と呼ばれる人々に、日本で生活していれば接することはまずない。子供や、明らかに栄養失調の人々、身体が不自由な人々が観光バスを止める度に私たちに物を求める姿はショッキング以外の何物でもなかった。健康で文化的な最低限度の生活がある程度保証されている日本で生きてきた私にとって、「生存すること」が保証されていないということ自体が「当たり前」であるという感覚が衝撃的だった。「当たり前」のことが、当たり前ではない。日本では気づけなかったが、この気づきはこれから先も大切にしていきたい。

法学2　立川　雅

今回のような機会がないとインドやネパールに行くことはないだろうと、思い切って研修に参加しましたが参加して本当によかったです。一回生の時に学んだ仏教の始まりの地に実際に訪れ、各国から来た様々な仏教徒がそれぞれの国のお経を唱えていて、それが同じ場

スワヤンブナート

教育１　中野佳代

私は「仏教の授業で出てくる建造物や仏陀が見たであろう風景を自分の目で見たい。」と思い宗教教育海外研修会への参加を決めました。

釈尊成道の地ブッダガヤでは、ミャンマー、タイをはじめとする多くの方が母国の念仏を唱えており、その熱気に衝撃を受けました。タージマハルや最終日に見た朝陽に輝くヒマラヤの美しさは一生忘れることはありません。

大学に入学し、周りの方から「大学生のうちにたくさん海外へ行くといいよ。」といわれる機会が増え、私は、「大学を卒業するとなかなか自由な時間が取れないからだ。」と思っていました。しかし、それだけではないことがこの研修を経てわかりました。海外へ行き自分の知らない景色を見て歴史を学ぶことは、なりたい自分を見つけるときに必要な糧にもなりえるのです。

私が安心して充実した十日間の研修を終えることができたのは添乗員さんをはじめとする先生方、現地のガイドさんのおかげです。本当にありがとうございました。

法学１　久松和香奈

大学に入学して以来、学びや環境が今までとすべて異なり日々新しいことの連続でした。それは仏教学の授業も同じで、さらに深く学べる機会があるのならぜひとも、と思い立ちこの宗教教育海外研修に参加しました。十一日間の旅を終えた率直な感想としては、「壮絶だった」という印象です。宗教教育の一環としてインド・ネパールの各地に散らばっている聖地を自身の目で直に見て回り、その空気や雰囲気を身体で感じて宗教に対するイメージが変わりました。それと同時に、「宗教とは何か」を本能的に理解することが少しはできたのではないかと思います。行く先々でガイドの方や先生による説明があり、授業で学んだことに関して再度聞く機会もありましたが、現地でいろんなことを見聞きすることで、なるほどとようやく腑に落ちたことも何度かありました。また、現地での暮らしや人々の様子も学べ、数日間で色濃い貴重な経験ができて本当に良かったです。

史学４　宮本麻菜

研修旅行では、全く異なる社会や価値観に出会うことができました。ただの情報として知っていたインド・ネパールではなく、現地の生の様子をたくさん見ました。発展している都会と田舎の差が大きいこと、その都会の中でも綺麗な建物と崩れかけの建物が隣り合って立っていました。

インドは様々な差が見えやすい社会でした。観光地の道端を歩けば、みすぼらしい格好をしたたくさんの子供や女性が物乞いをしています。その近くでは、綺麗なシャツを着た人がお土産を売っています。誰もそのような光景に疑問を抱いているようには見えず、インドではそれが日常の風景であるようでした。このような状況では、私一人がお金や物を渡したところで、永遠にその絶対的な差などなくなりません。

これがインドという国のあり方なのかもしれません。ですが、その絶対的な差を埋めていくために、私に何ができるのか考え続けていかなければならないと感じました。

史学３　山本佳乃

今回の研修旅行は、私にとって、とても有意義な時間となりました。海外には何度か訪れたことがありましたが、インド・ネパールは、海外というよりかは、どこか異世界に迷い込んだような感覚でした。デリーに到着した時の濃霧や、ガンジス川での沐浴の風景は決して日本では味わえない光景でした。

また、旅行中は様々な仏教遺跡を巡りました。中でも、私が一番衝撃を受けたのが、釈尊成道の地であるブダガヤの大菩提寺(Mahabodhi Temple)です。ここは、世界遺産にも登録されている仏教の最大聖地です。ここでは世界各国の仏教徒の方々が集まり、皆さんそれぞれの国のお経でお勤めをされていました。その光景が衝撃で、自分の理解をはるかに超え、処理できなくなったのを覚えています。

今から約二五〇〇年前に誕生した仏教が、現代にまで受け継がれ、人々の信仰を集めていることは、仏教の教えが他を排除するのではなく、他に寄り添う教えだからなのだろうと、改めて思いました。

英文４　若林愛果

インド・ネパール研修旅行に参加して最も良かったことは、私が今まで見ていた世界の外には、もっと広い世界が広がっている、ということを知れたことだ。私が日常生活で目にする景色は、広い世界のほんの一部でしかない。自分とは全く異なる景色を見て暮らし、価値観も考えも生き方も、お互いに想像も出来ないほどに違った人達がいた。同じ日本人でも同じ大学生でも異なっているが、世界中の人が、それぞれの環境で、それぞれの人生を、それぞれ一生懸命に生きていた。私はこれまで自分のことが好きになれず、他人に憧れ、別の誰かになりたいと思って生きていたが、今回の研修旅行を通し変化があった。一人一人がそれぞれの縁によって生きている。自分と他人が違うことも、一人一人がそれぞれの縁によって生きているからで、そして世界中には無限の縁が広がっている。これからは、誰かを見て生きるのではなく、私という存在から世界を見て、私で私を生きてゆきたい。

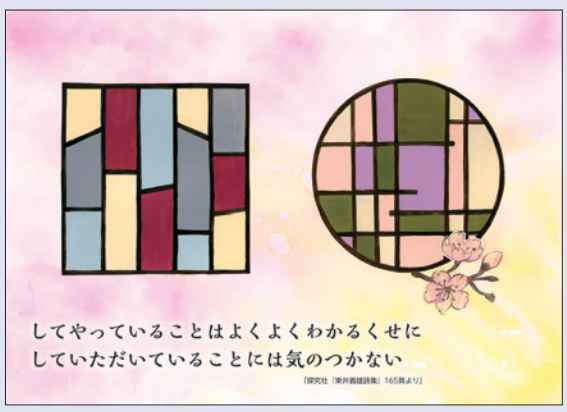
【参加者の学年は研修会実施時の学年です】

宗教部文書活動のお知らせ

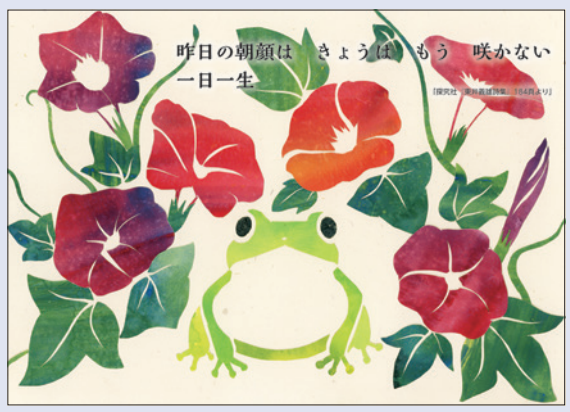
宗教教育センターでは、仏教を基調とする宗教教育を学校教育の中に具体化するために、文書活動を行っています。文書活動によって、広く宗教的知識を習得します。また、情報交換によるふれあいを通して相互の深い人間関係をめざします。今回は、その中でもオリジナルカレンダー（吊下げ型、卓上型）を紹介します。

当カレンダーは味わい深い法語と、本学の絵画部が作成した切り絵を組み合わせた内容となっています。皆さんが参加しやすいように、宗教教育センターが実施する年間の各行事も日程に入れています。ぜひ皆さんも、普段の生活にご利用ください。

〈月別絵画担当者〉



４・５月担当　豊田　友紀さん



６・７月担当　富田　咲希さん

８・９月担当　岡田　千佳さん

10・11月担当　本間　亜希さん

12・１月担当　北野　奈々さん

２・３月担当　伊藤　千尋さん

直感力と人知を超えた存在

文学部准教授　下村冬彦

仏教の教えの中に、「仏はこの世の父である。だから、あらゆる人びとはみな仏の子である。」（法華経第三、譬喩品）という箇所があります。仏（すなわち人知を越えた存在）の子である私たちは、常にその人知を越えた存在に見守られる中で日々を過ごしている、と言っても過言ではないでしょう。人知を越えた存在が私たちの人生の歩みに目を配っていてくださることを自覚するのは、むしろ人生がうまくいかないときの方が多いのではないかと思います。私は、今までの人生の中で、人知を越えた存在が自分の人生の歩みに共にいてくださるのだと感じる機会を何度か与えて頂きました。その中で特に、今の自分の人生の歩みに大きく影響を与えている出来事について書かせていただきたいと思います。

教職に就いておられるご立派な先生方が、たくさんお読みになられるであろう原稿にこのような失礼なことを書かせていただくのは大変気がひけるのですが、祖父母が全員元小学校教員の教師一家に育った私は、自分の少々へそ曲がりであまのじゃくな性格も手伝ってか、教員にだけはなるまい、と教職という就職の選択肢を全く考えていませんでした。ですから長い海外生活を終えて帰国した時、私がついた職業は、教職とは関係のない外資系企業の営業職でした。組織の考え方と自分の物の見方や感じ方もそこまで大きくかけ離れていたわけでもなく、営業成績もそこそこでした。このまま、そこそこのお給料をいただいて、安定した生活を送りながら歳をとるのか、とふと考えました。すると、それまでだましだまし目をつぶって見ないようにしてきた、自分の心の中にあった営業職に就いている自分に対する違和感が、相当大きくなっていることに気がついたのです。人知を越えた存在にいただいたご縁で就けたのかもしれない仕事に対して、おこがましい発想なのかもしれませんが、「本当にこの仕事でいいのだろうか？」「このまま歳を重ねていって、自分は本当に後悔しないのだろうか？」とよく考えるようになりました。

結局私は、その自分が直感的に感じた違和感という心の叫びと向き合い、人知を越えた存在のお導きによってありがたいご縁をいただくことができ、今の教職の道へと繋がっています。教職についてからは、仕事に対する違和感は全く感じなくなり、仕事に対しての工夫を考えることを楽しむ余裕も出てきました。違和感を感じる仕事を自分をだましだまし続けていたら、職務をよりよく果たすために能動的に動いたり、工夫をこらしたりすることは、きっとかなり難しかったに違いありません。自分の心の声、とくに違和感などのような直感的に感じ取るものは、人知を越えた存在からのメッセージである可能性もあるのかもしれないと考えさせられた出来事でした。

話は少々脱線しますが、みなさんはオプラ・ウィンフリーというアメリカのトークショーホストで慈善活動も活発に行っておられる女性をご存知でしょうか？　彼女が2008年に、サンフランシスコのスタンフォード大学の卒業式にゲストスピーカーとして呼ばれた際に、直感の重要さについてお話をされておられますので、一節をご紹介させていただきたいと思います。

“And how do you know when you're doing something right? How do you know that? It feels so. What I know now is that feelings are really your GPS system for life. When you're supposed to do something, or not supposed to do something, your emotional guidance system lets you know. The trick is to learn to check your ego at the door and start checking your gut instead. Every right decision I've made—every right decision I've ever made—has come from my gut. And every wrong decision I've ever made was a result of me not listening to the greater voice of myself.”

要約：「自分が正しいことをしているかどうか知りたかったら、自分の直感を信じなさい。ただその直感や感じ取ったことに自分のエゴ（＝わがまま、我）が入っていないかどうかしっかり確認して、自分のガッツ（＝勇気、パッション）が何かをしっかり見極めるといいでしょう。私が今までの人生で正しい結論を出してきたときは、すべてそれは私の勇気から出てきた決断の結果で、私が間違った結論を出したときは、それはいつも私が自分の内なる偉大な声を、しっかり聞くことができなかった結果でした。」

自分の就職に関して、その仕事への違和感という自分の感じたものを大切にした結果、やりがいのある仕事に就くことが許された経験からも、私はこの自身の「内なる偉大な声」に私たちの使命を果たす上で重要な情報や、人知を越えた存在の意思が含まれているように思われてなりません。私たちはみな、果たすべき使命を持って生まれてきます。その使命から大幅に外れた選択肢を選ぼうとすると、使命を果たしやすい方向へと軌道を修正できるよう、さまざまな方法で、人知を越えた存在は私たちの自由意志を侵害しない方法で、導いてくださるのかも知れません。

深い悲しみの淵にある時や、草臥れ果てている時には励ましや慰めであったり、あるいは身に危険が迫っている時にはその危険からの護りであったり、歩むべき道を間違えそうになっている時には、その道を進み続けるのは危ないという警告であったり、その時々の状況に応じて、人知を越えた存在がくださるものは違うでしょうが、絶えず人知を越えた存在は私の人生の歩みを見守っていてくださるのだと、様々な人生の出来事を通し、私は実感する機会を与えて頂きました。みなさんの今までもこれからも、人生の歩みは決して平坦ではないと思います。神も仏もあるものかと思うような非常に苦しい状況や、深い悲しみを経験されることもあるでしょう。そんな悲しみや嘆きの淵にある時こそ、人知を越えた存在がみなさんお一人お一人の歩みを常に見守っていてくださることを忘れず、人知を越えた存在の声を聞き取ったり感じとったりできる感受性や、人知を越えた存在の恵みに感謝できる謙虚さを磨き、与えられた使命を全うできる、幸せで実り豊かな人生を歩んでくださることを心から願います。

法のことば

すべて悪しきことをなさず、
善いことを行い、
自己の心を浄めること、
――これが諸の仏の教えである。

（『ダンマパダ』一八三、中村元訳）

この詩節は古来「七仏通戒偈」と呼ばれ、諸仏が（ここで「仏」は複数形です）共通して説いた真理として尊重されてきました。その内容はとても普遍的です。善いことをなし、悪いことをやめる。善悪の内容はさておき、これは、ほとんどの宗教が説く事柄ではないでしょうか。

しかし、このシンプルな教えを実践することは容易ではありません。まず、善や悪と確信したり、当たり前のように知っていることでも、それを貫くことはとても困難です。また、そもそも何が善で何が悪かということについて、私たちはしばしば迷います。だからこそ、この詩節には、もう一つ「自己の心を浄めること」が説かれています。ここに、私たちの行いの根っことなる心のあり方こそを問題とするという仏教の特徴が表れています。

（藤井　隆道）

お知らせ

❊ 親鸞聖人降誕会（春のバスツアー） ❊

日　　時　2019年5月21日（火）
9：00～16：30
行　　先　青蓮院・嵐山散策
募集人数　85名（先着順）

※大学体育館での式典後、バスツアーを行います。

❊ 日帰り研修会「坐禅と写経」 ❊

行　　先　比叡山延暦寺
日　　時　2019年6月1日（土）
8：15　大学集合
15：45　現地解散
参 加 費　800円
募集人数　30名（先着順）

※いずれも申込・詳細は京女ポータル、L校舎前の掲示板または宗教教育センター（L校舎3階）で確認してください。

仏典随想

親鸞聖人『三帖和讃』

塚本一真

「にょーらーいだいひーの♪」。礼拝や式典で必ず流れるメロディーと歌詞、京女生であれば一度は耳にしたことがある「恩徳讃」。さて、その作詞は誰でしょうか。

『聖典』には「親鸞聖人和讃」とあります。「和讃」とは、仏さまとその教えを和語にて讃嘆した歌です。親鸞聖人には『浄土和讃』『高僧和讃』『正像末和讃』の三つを合わせた「三帖和讃」があります。「恩徳讃」はそのうちの一首なのです。

従来の和讃が、美麗な修辞を駆使したものが多いのに対して、親鸞聖人の「和讃」は質実で力強い雰囲気があります。内容には、経典やインド・中国・日本の高僧方の言葉を拠り所として、懇切丁寧に仏さまの教えを、また自身の喜びや歎きが数々表現されているのです。その数は、なんと三五〇首を越えます。

また、この「三帖和讃」は、一首が七五調四句で形成されており、当時一般に流行していた今様の調べに合うものといわれています。つまり、「三帖和讃」にはもともと音楽的要素があり、古くから節譜付けがされるだけでなく、現在でも音楽法要（仏教の行事）や仏教讃歌に用いられているのです。七五調とは、日本の詩歌に用いる伝統的な形式です。有名なところでは、「夕やけこやけ」や「どんぐりころころ」などがあります。同じ調子ですから、それらのメロディーに、実は和讃の言葉はのりやすいのです。試しに歌ってみてください。きっと身近に感じられるでしょう。

内容と語調を整えて三五〇首以上を作成するのは至難の業であろうと思います。それができたのは、親鸞聖人が深い仏教理解と音楽的素養の両方を備えていたからでしょう。比叡山時代の立場であった「堂僧」は「山の念仏」といわれる堂内でのおつとめを担当し、節譜のついた念仏をとなえていたといわれています。おそらく、そこで教えとともに音楽的素養を身につけられたのでしょう。言葉と調子のととのえられた「三帖和讃」、口ずさみやすい特徴的な形式です。「恩徳讃」の他にもぜひふれてみてください。

シリーズ　智慧の蔵㉓

『ビジュアルガイド　京都の大路小路』

森谷尅久　監修　小学館　二〇〇三年

「京都女子大学ってどこにあんの？」

「東山七条の交差点を東に入ったとこ」

「東山七条って、通り名でいうとどの辺？」

「七条通を鴨川を越えてさらに東に行くと東大路通があるやろ。あの七条通と東大路通の交差点を東山七条と言うねん。そこから歩いて五分ほど東向きに坂上ったとこにある。」

もし、京都人同士で京女の立地について問答したら、こんな感じになると思います。いかがですか。皆さんなら、このように答えられますか。或いはこのように教えてもらったとして、京都市の地図上に京女の位置がイメージできますか。

よく知られているとおり、京都の町並みは縦横の通りが直角に交差する碁盤の目のような形になっています。ですから、通り名と大まかな位置関係さえ憶えておけば、現在地や目的地が簡単にイメージできるようになっているのです。不慣れな人でも、京都で数年生活すれば、自分の生活圏内の通り名に関しては自然と憶えられると思います。

しかし、そもそも京都の町は、なぜ碁盤の目のようになっているのか。それは昔々京に都が建てられた時（七九四ウグイス平安京）、中国の都城制にならって、その町並みが縦横の通りによって区画整理されたことに由来します。

平安京は、南北が約五・二キロ、東西が約四・七キロの、やや縦長の四角形を外郭とし、南北に走る三十六本の大路小路（大小の通り）と、東西を走る三十九本の大路小路を骨格とする計画都市でした。それが碁盤の目に譬えられる、現在の町並みの原形となったのです。今も残る一条から九条に至る東西の通り名や、京極、洞院、堀川、大宮等の南北の通り名も、全て平安京の大路名に遡ることができます。

本書はこうした歴史的な経緯を踏まえつつ、京都の町中を走る通りを中心に、その現在の姿を豊富な写真と共に紹介する良書です。北は今出川通から南は九条通まで、東は木屋町通から西は左井通まで、また洛外の道として若狭街道から南浜通まで、全百四十七本の通りを見やすく、分かりやすく、楽しく紹介してくれています。

家の前の身近な通りから、繁華街の大通りまで、本書を介してその故事来歴を知れば、今まで知らなかった新たな魅力を発見できるはず。長く京都に住んでいる人にも、この春から京都に引っ越してきた人にもお勧めの一書です。

（上野　隆平）